

戦時における工芸と生活

——「輸出工芸」と「国民生活用品」

森 仁史

今年は第二次世界大戦が終結してから八十年目にあたるといふ。この機会に、日本の戦時にデザインがどんな実践をたどることになったかを振り返っておきたい。国策プロパガンダとしてのグラフィックデザインはしばしば語られているので、その他の領域はどうであったか。戦争はまさに総力戦になったから、生活スタイルからそこで用いる生活用品まで国民生活は隅々まで改変を余儀なくされ、それに応じた製造技法、デザインが課題となった。

戦争を遂行するためには、資源の乏しい日本にとっては資源節減は必須の課題であった。昭和十三年（一九三八）商工省工務局は国民に中国での戦闘拡大に伴って軍需増産が必要であり、資材確保が必要となる構造を国民に周知徹底しようとした。具体的にまず軍需生産に必要な資源を代用品で充当することであった。

今回の支那事変は我国始まつて以来の国家総力戦です。戦線にある皇軍将士と同様に銃後にある国民が、一致団結して国策に協力すべき事は申すまでもありません。……戦争に必要な物資の供給確保の為に国民が代用品を使つて必要物資の消費節約を図る必要があるのです。……年々原料の輸入が総額の八割迄を占めてゐる我國

として国際貸借の改善を致す為には何物を措いても原料の自給が必要で、所が我国にはそんな天然資源が無いのですから化学の力で夫等の原料の代用品を造らねばなりません。「代用品に就て」商工省事務局

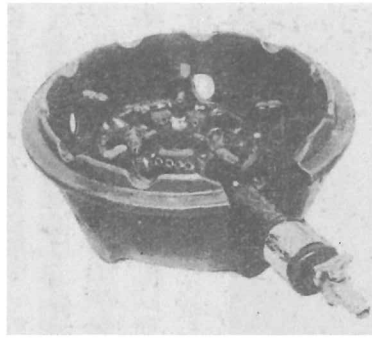
太平洋地域での戦争開始以前から、戦争に必要な銃後の体制確立を目指したことは全面戦争準備の開始として注目すべきである。金属、皮革、ゴム、その他（ガラス、石綿）を節減の主要目標とし、十月五日から日本産業館で代用品工業振興展が開催され、同展は十二月にかけて大阪（府工業奨励館）、札幌（農業館）、福岡（第一公会堂）、仙台（市公会堂）、名古屋（愛知県商工館）で巡回開催された。化学工業原材料、皮革、ゴム、金属、繊維工業の代用品が三二〇人から一五五〇点出品された。同展は十四年に第二回展が東京、旭川、新潟、京都、広島、熊本で、十五年第三回展が東京、函館、金沢、神戸、高松、鹿児島で開かれた。しかしこの代用品はすでに製造されているものの中から充当できる製品を選ぶ事業であった。日本商工会議所は共同カタログを作成し、認定マーク（図1）を発行した。原材料を牛皮から魚皮、セルロースへ、鉄から陶製、木材、ガラスなどに変更して製品化したものであった。しかし、こうした変更が可能な品目は靴、カバン（図2）、コンロ（図3）、洗面器など極めて限定された範囲だったが、節減効果も限定的にとどまらざるをえなかった。この程度では商工省が目論む原料の補填は到底おぼつかないのは明白であろう。

* * *

また、商工省は同時に貿易収支改善のため、依然として輸出振興を達成する目標も捨ててはおらず、昭和七年（一九三二）八月十七日商



3 松崎《ボストンバッグ》



2 帝国耐熱陶磁器研究所《陶製瓦斯七輪》



1 日商選定新興品マーク

工省は輸出工芸増進懇談会を開き、中島商工大臣、吉野信次商工次官、商務、工務、貿易局長、陶磁器試験所長、工芸指導所のほか工芸、実業界から十数名が出席した。ここで海外に於ける意匠、圖案調査機関の設置、海外へ工芸研究員の派遣、輸出向け工芸品展開催などが決定された。これをうけて、八年十月日本輸出工芸連合会（会長安田祿造、以下連合会）が設立され、第一回輸出工芸展が開催さ



5 『近畿連合輸出向工芸試作品展覧会報告書 第2回』同展事務所、昭和11年 A5判81頁



4 池田美明編『輸出工芸』第1号、日本輸出工芸連合会、昭和14年8月

推進しようとしていたのが分かる。明治初期の温知図録の作成、貸与以来、明治末の商品陳列館の開設へと日本政府は輸出拡大政策を展開してきたが、それはおもに国際競争力を高めるためのデザイン改良であり、それを達成するための事業を連合会は漏れなく列挙している。つまり、政府当局にとって必要と捉えられてきた政策は四十年を経過しても依然として実現できていなかったことになる。この時期、日本の輸出製品は安価であっても低品質であったため、製品として評価が低く、輸出が伸び悩んでいる実情を何とか解消しなければ、望むような輸出拡大は実現できないことは明らかだった。ここで注意しておかなければならないのは、この「工芸」は一九一七年に安田が定義したデザイン製品を指しており、この

れた。同展は十四年三月それまで開催してきた商工省展を合流させて開催することとした。同年から機関誌『輸出工芸』（図4）が創刊され、その表紙裏に同会事業が次のように列挙されている。

一、工芸的商品取引の紹介及び斡旋 二、日本工芸品海外展示会の開催 三、国際見本市への参加 四、見本の買上及び海外頒布 五、海外競争品見本の蒐集及び展示 六、工芸図案の配布及び貸与 七、型録の発行 八、陳列室の設置 九、図書室の開放 十、図書印刷物の発行 十一、講演会座談会の開催 十二、其他工芸品輸出促進に関する業務

輸出工芸振興会は九年以降各府県にも設立され、同年から地域別の輸出工芸展が確認できただけでも、中国四国六県、北信五県、東海四県、近畿、関東府県などで開催され、これらの展覧会でも充実した図録（図5）が作成されており、いかに政府がこの政策を強力に

時期の日本では手仕事も工業的手段も含んでいた。日本政府はなかでも陶磁器と漆器を輸出の主力と考えていた。

高村豊周のJ.O.A.K.での講話がこの『輸出工芸』創刊号の冒頭に掲載されている。こうした現状とその対応策について、連合会が目指していた構想とその実行策に重なるものだったからだとみられる。高村は日本の工芸品について、「日常道具などを見ましても、どんな雑具でもすべてが手堅く良心的で、今日よく言はれる美と用とを完全に兼ね備へたもの」なのだから、「輸出工芸品の文化的水準を昂めるといふ事が工芸振興の本質に於て一の重大な目標となる」と主張している。これを達成するためには、「向の人に日本的なるものを選ばせて、…輸出工芸として製作的に欠点の多いものであつたならば、それを技術指導官の方で輸出向に作り直して、うまく生かしてやる」ことが必要だと述べている。

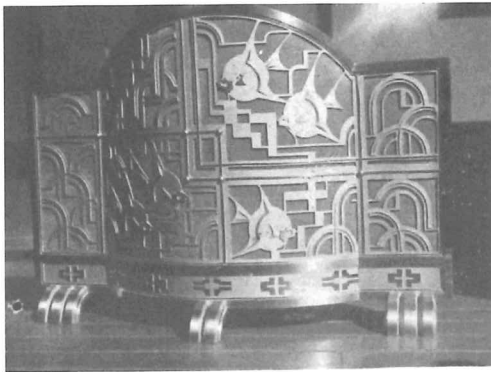
高村のこの発言は昭和十年（一九三五）実在工芸美術会を結成し、「大量生産たると一品制作たるとを問はず一の作品に於いては、用が美に寄留してあることも、用と美とが同居してあることも共にいけない。用即美として一の絶対である時にのみそこに工芸的真がある。」（『実在工芸』1、昭和十一年一月）と宣言して、「一般工芸品」という概念によつて量産であると一品制作であるとを問わないで競わせようとした体験に基づいていると思える。つまり、高村らの試みは未発達なデザイン活動に先駆けて、あるべき工業製品の未来像を探ろうしたのである。これは後進資本主義国である日本ならではの現象であり、専門の工業デザイナーが不在な国でその役割を自覚的な工芸作家が代替しようとしたのであった。実

在工芸賞の受賞作（図6）を見れば、実用品ではあるもののいわゆる美術工芸作家の作品であったことによく表われている。

商工省傘下の試験研究機関はこの時期に前記の方針に沿つたと思われる研究成果を図録として纏めて発行しているので、紹介しておこう。

商工省工芸指導所『輸出向工芸品図録』同所、昭和九年

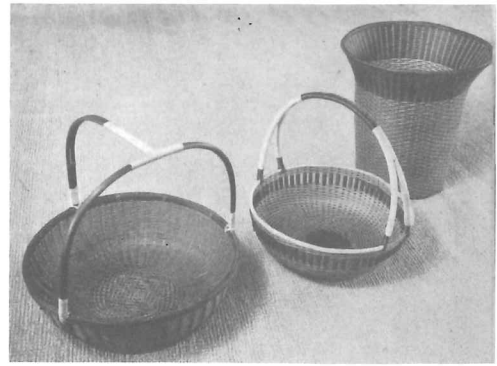
指導所は解体式家具（図7）、竹材応用工芸品、編組工芸品、縹綯塗応用、新変塗応用、布帛応用漆器、新意匠による小工芸品、日用金属器、金属製品の新着色法、軽金属工芸品、家具及漆器に使用する蝶番の分野に試作品を製作し、第二回展に出品した。解体できる家具が輸出向けに必要なのは輸送に際して梱包を小さくすることによって、経費を節減することがねらいであった。木竹材や編組技法（図8）は日本特有の材料、技法を生かそうとしたものであるが、デザインの洗練度はまだ十分とはいえないように見える。また、漆の新開発技法に



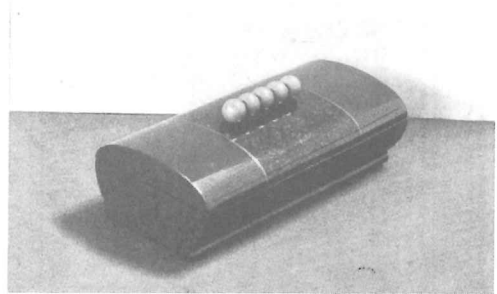
6 清水巖《ストーブ立》1936年



7 《茶卓子》



8 《肩籠及び洋酒瓶入籠》



9 《小箱》(藤緞塗と玉虫塗を使用)



10 《日本趣味化肉皿》1935年

よる製品(図9)も海外の嗜好に日本の伝統技法を適用しただけで、その融合が従来にない新しい造形を結実させるには至っておらず、前年にタウトから批判を受けた水準を脱しているようには見えない。

商工省陶磁器試験所編『商工省輸出品展覧会出品図集』第一回、第二回 田中平安堂、昭和九、十年

陶磁器試験所も輸出拡大のための試作を数多く実践した。同所ではすでに大正十一年(一九二二)から西洋食器に日本意匠をデザインする試みが始まっており、この時もこのテーマが中心に取り上げられ(図10)、それには「東洋芸術の最も長所とする筆力の表現と、自由且不均斉図案」が採用された。日本人デザイナーが世界に向けて自らの個性を確固として主張できる立脚点を自覚的に実践している。他には陶彫、ドアノブなどの新しい用途とポーンチャイナ、白雲陶器、圧縮鋳込など新技術による製品が出品され、技法で欧米にない領域を切り

逸の部、第四中欧の部、増刊仏蘭西・瑞典・西班牙の部、日本輸出工芸連合会、昭和九年

②日野厚『海外工芸近況』東京府、昭和十一年か 菊判、32頁

③山崎覚太郎『海外工芸の新傾向』日本輸出工芸連合会、昭和十二年

A 5判、181頁

④斎藤信治、杉田精二『欧米の新工芸』日本輸出工芸連合会、昭和十

四年 B 5判 124頁

⑤宮下孝雄『時局下の世界工芸』日本輸出工芸連合会、昭和十五年

B 5判 162頁

⑥杉山豊桔『輸出資料としての北支工芸』日本輸出工芸連合会、昭和

十四年 B 5判 31頁

⑦水町和二郎『南北亞米利加乃工芸概観』日本輸出工芸連合会、昭和

十六年 B 5判 184頁

拓こうともしている。試験所はデザインと技術の二方面で世界に参入する途を探っていた。
先の決定に基づき、次のように海外へ専門家の派遣が始まった。最初の三名は商工省から、それ以後は連合会から世界各地に数か月にわたって情報収集と市場動向を調査させ(表参照)、次のように報告書が作成された。

①和田三造『欧米に於ける各種工芸事情』第一米国の部、第二北欧の部、第三独



11 斎藤信治、杉田精二
『欧米の新工芸』日本輸出
工芸連合会、昭和14年

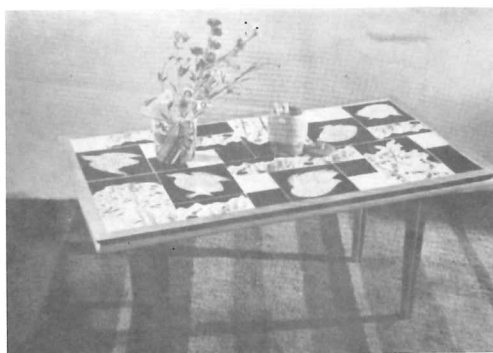
年月(昭和)	氏名	派遣先	報告書
七年十二月	国井喜太郎(工芸指導所長)	ヨーロッパ、アメリカ	
八年六月			
八年九月	和田三造(東京美術学校工芸科教授)	アメリカ、ヨーロッパ、三カ国	①
九年二月			
十年	青山義雄(画家)	ヨーロッパ	
十年秋	日野厚(大倉陶園支配人)	ヨーロッパ、アメリカ	②
十一年四月			
十二年	山崎寛太郎(東京美術学校工芸科助教授)	アメリカ、ヨーロッパ、十三カ国	③
十二年十二月	斎藤信治(工芸指導所技師)、杉田精二(大阪府工業奨励館技師)	ヨーロッパ九カ国、アメリカ	④
十三年	宮下孝雄(東京高等工芸学校工芸図案科教授)	ヨーロッパ六カ国、アメリカ、南米二カ国	⑤
十四年	杉山豊桔(東京高等工芸学校工芸図案科教授)	中国北支	⑥
十五年十一月	水町和三郎(陶磁器試験所技師)	アメリカ、南米二カ国	⑦
十六年六月	高村豊周(東京美術学校工芸科教授)	メキシコ、北米	
十六年四月			

ほぼすべての派遣者がアメリカを訪れているのはそれが日本の最大の輸出相手国だったからである。報告書(図11)のなかで、斎藤信治がアメリ

カを訪れて、「亜米利加合衆国は吾国輸出の最大顧客たる地位を占めてゐるが、それでも其の全輸入額の僅か六・五パーセント(一九三七年統計)にしか当たらぬのだから、其処には未だ多くの食ひ込み得る余地が残されてゐる」ととらえるのは当時の関係者の共通した認識だった。しかも、「一般亜米利加人の美術及工芸に関する鑑識も左程低級なものと断ずることは当らぬと思ふ。」ので、「亜米利加が現在及将来本邦工芸品の市場として最も良い条件を備へてゐる」考えた。同行した杉田は美術工芸作家として美校在在校時から高村と行動を共にしていたが、昭和七年から大阪府でデザイン指導に当たっていた。アメリカで杉田が直面したのは「日本の輸出品は安物雑貨品」であり、「日本品は脆弱である」という現実だった。それを克服すべく、高級品を輸出すべきだと主張したが、同時に「米人の好むものは堅固で実用的な事である。そして其中に自ら美を持てる様に作ることである。機械製品は綿密正確に、手工品は手工品らしい面白味を持つことである。」と述べ、きわめて実践的に機能主義デザインに近い提言を行っている。

この商況調査が昭和十六年(一九四二)まで続けられていたことをみると、商工省は日米開戦の危機を全く顧慮していなかったかのようである。ただ、アメリカ合衆国ではすでに日米関係の緊張から日貨排斥が起こつていたので、商工省は南米に販路を求めたようである。太平洋で戦闘が現実視される情勢下では、ほとんど夢想としかいえないような計画である。その後も変わらぬ日本の商工官僚の身びいき一方の感覚ではないか。

さらに反対に海外から専門家を招くことも計画され、宮下孝雄の人選によつて昭和十四年(一九三九)ドイツからT・P・シュレーマンが



12 シュレーマン《ティーテーブル》1940年
(陶磁器試験所との合作)

招かれ九月に東京に到着し、各地を視察し、講演したのち、翌年七月の第二回輸出工芸展にその成果を出品(図12)した。フォルムとしての機能主義を追求したものではないが、ヨーロッパ的な手法に日本の焼物の特性を掛け合わせている。続いて坂倉順三の推薦により同年八月にフランスからC・ペリアンが神戸に到着した。ペリアンの日本デザインへの寄与はよく知られているが、シュレーマンもまた各地を回って「沢山の良い仕事を見ました。それは世の工芸界、手芸界が努力してゐる所の流れにまで達してゐる程」だと肯定的にとらえた。商工省が進めようとしていた工芸による輸出拡大は海外の専門家からも支持されたと感じたことだろう。これらの政策は昭和十六年十二月の真珠湾攻撃、東南アジアでの戦闘開始によって頓挫することになった。

この間に、昭和十五年(一九四〇)七月奢侈品等製造販売制限規則、いわゆる七・七禁令が施行され、公定価格以上の商品を製造、販売できなくなつたことで美術工芸や生活用品の製作は基準以上の工作は禁止されることになった。観賞用の作品も豪華な商品も作れなくなつた。しかし、十六年八月に府県知事に商工次官通達「技術保存ニ関スル件」が通達され、翌年大日本工芸会(吉野信次会長)が結成されると、文展出品者などの「芸術保存又ハ技術保存ヲ要スベキモノ」資格認定

者にはこれを通じて材料の供給が実施された。さらに一八年六月「芸術保存及技術保存ニ関スル件」が通達され、美術工芸制作の素材は五月に設立されたいわゆる美統を通じて行われることになった。その設立趣意で「皇国文化の中心に位し、その精華たる美術及工芸技術の保存並に振興を図るは国力総動員の見地より、真に緊要に属する」と宣言された。輸出工芸にとつては日本工芸の優秀さは国際的な視点から魅力を得られるがゆえに輸出拡大の根拠となつていたが、今や「われわれは東亜最高文明国、最も先進の国、—大東亜共栄圏の指導国家である」と自認する観点から「この指導国家の工芸関係者たるわれわれは、今後いかにして工芸指導力を全東亜におよぼす」(国井喜太郎「先進国の体験を大東亜に活か」『工芸ニュース』12-1)べき立場にあると認識され、アジア諸国を指導する根拠卵に転化したのだ。しかし、国内では世界に類を見ない美術、工芸制作までを統制せざるを得ないほどに物資は窮乏しており、それはファナティックなまでのナシヨナリズムに基づくほかにないことになった。

*

*

*

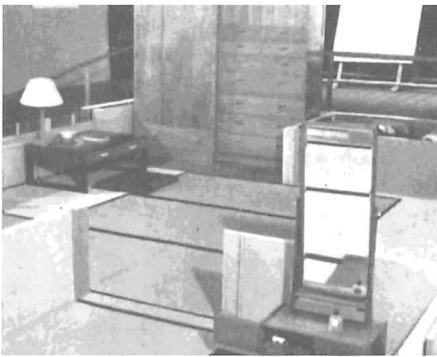
生活用品について「物資配分の新しい流れは、私共の所謂生活必需品の方面に於いても、最小の材料から最大の機能を生み出すやうに求めており」、これに沿つて家具や食器にも新たな工夫が求められるとして、商工省は昭和十六年十月国民生活用品展(高島屋東京店、十一月に大阪展)を開催した。同展は(一)新体制最低生活基準の展示、(二)国民生活用品の合理化、(三)文化様式の是正確立を展示目標とした。展覧会趣意書に「国民生活ノ具タル生活用品モ亦実用簡素ナルモノヲラシメル」ことを「関係産業者ニ此ノ根本指導方針ノ徹底ヲ図」ること

を目的とした。展覧会には一般出品のほか工芸指導所、陶磁器試験所の試作も並べられた。洋風家具を是正整備したものの、伝統生活用品を合理化したものの、資材転換したものが一般出品として募集され、民間業者から二八四五点申し込みがあり、二六一点が監査を合格し、十九点に褒状(図13)が与えられた。会場にはその他に厚生省生活局住宅課及び住宅営団研究部設計による労務者住宅模型のモデルハウス(図14、15)も展示され、家具を工芸指導所が製作した。住宅は十七・七坪で間取りは子供室(六畳)、居間兼寝室(六畳)、茶の間(四畳半)、台所に玄関、湯殿便所が付設されていた。夫婦と子ども二人の居住が想定され、家具はちゃぶ台を含め九点であった(図14、15)。

展覧会に先駆けて七月商工大臣官邸において関係者十六名が出席して懇談会が開かれた。席上、陸軍経理局長からこの展覧会出品が生産標準型を目指すのかという質問に対し、商工省化学局長は「全部を標準型として普及させるわけには参らない」と及び腰であったが、海軍



13 三越大阪支店《簡易家具セット》

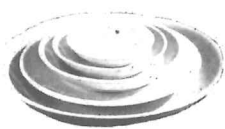


14・15 労務者住宅茶の間・居間から茶の間の

省軍需局長から「この際寧ろ標準型を定める位にして欲しい。」との発言があり、商工省よりも軍部が資源節減のための標準化の必要をより強く感じていたことが分かる。

十月にこの展覧会に合わせて、工芸指導所は会場で生活用具に関し、て関係者から意見を聞くために懇談会を開き、「国民生活用具の問題」(工業調査会、昭和十七年)と題したパンフレットが作成された。出席したのは長谷川如是閑、今和次郎、内藤濯、團伊能、富塚清、式場隆三郎、堀口捨巳、伊原宇三郎、遠藤元男、帯刀貞代、佐野智慧であった。長谷川と堀口は本展が提起する生活形態が大きな変革であり、堀口は「今後の平和な時に於いても用いなければならないもの」となるべきだと主張している。長谷川は「今の此の時代に工夫されて衣服でも家具でも、やはり先づそれが日本人の心と一致した形で、その心を養ふ性質のものであれば、それは残るといふのです。」と述べ、これが明治維新以後に並ぶ大きな変換になり、的を得れば新しい基準になると予測している。ただ、内藤は本展出品が「中から滲み出る類の美しさが感じられない」と指摘していて、展示品が新しい国民生活を表す適切なデザインに至っていないとの判断も示された。

国民生活用品展は第二回展が昭和十八年(二九四三)三月に開かれた。この開催趣意では「銃後ノ国民ハ極力物資ノ節約ヲ図リ、之ヲ必要ナル方面ニ供出スル一方、日常生活ヲ規正(合理化)スルト共ニ、簡素ニシテ明



17 小什器の規格品

の原則は明らかに輸出増進とは相反する方向であり、資源節減を目指すなら輸出を放棄するほかはなくなっていた。

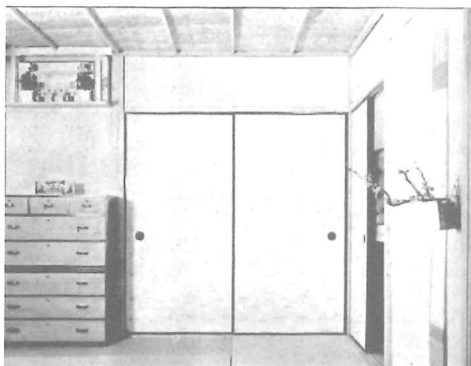
会場入口に住宅営団設計による建坪七・五坪の戦時規格住宅〔図18、19〕が建てられた。これは食事室（三畳）、寝室（六畳）からのみ成り、玄関、台所が付属する。二年前に想定された基準と比較すると、半分の以下の面積であり、置かれた家具も三点のみだった。さらに、展示に



16 大野木昇一《折畳乳母車》

朗健全ナラシムル様一層ノ工夫ヲ要スル」ことが強調された。学生用机、玩具、集団用食器、洗面器など三十五種が募集され、一般出品五一七件の応募があり、監査に合格したのは一二二件で、応募は五分の一に減っており、戦況の悪化による物資の欠乏から、新規の製品開発に余力がなくなっていた状況が窺える。襖状が十件に与えられ〔図16〕だが、殆どが木竹製か陶磁、合成皮革であった。

今回の展示では規格化が前面に押し出され、日本標準規格JESが紹介展示された。中央物価統制協力会議が生活用品の規格単純化を推進しようと、家具と小什器の規格品〔図17〕を試作展示した。これらは工芸指導所、陶磁器試験所、日本家具統制協会ほかが設計、製作にあたった。機能主義デザインの主要な原則である規格化を日本でも徹底しなければならぬことが強調されたが、こ



18-19 規格住宅六畳間と三畳間（揚げ板下に待避壕）

は戦時「住ひ方」心得が掲げられていた。

- 一、神棚、仏壇を正しく祀る事
- 二、部屋の使ひ途を明確にする事
- 三、整理、整頓、清掃に努める事
- 四、家具は配置を適正に、使ひよい物を数少なく持つ事
- 五、遊んでゐる空間を充分利用する事
- 六、防空退避の備へを怠らぬ事
- 七、家庭工作を心掛けて、なるべく自製、修繕に努める事
- 八、簡素美と床しい嗜みを忘れぬ事

機能主義デザインにおける合理化は生活を快適にするための方策であったが、ここでは戦争完遂のため手立てとなっていた。もはや物資欠乏は覆い難いので、国民には信仰と自助努力を強いるほかに選択肢がなくなっていることを自ずと明かにしている。戦争は技術の優劣に他ならないので、物質的優劣が明白になってもなお、それを覆い隠す別な根拠を探すなら、精神的抑制以外に対応がなくなったのである。

一寸

第一〇一号 二〇二五年七月

近代版画史考証

——「版画」と「板画」の表記——

岩切信一郎

第一〇一号目次

近代版画史考証

——「版画」と「板画」の表記——

岩切信一郎 1

時に抗いし者たち——私の小菩薩峠 (55)

大谷 芳久 10

関東大震災下の主義者たち

草木雑記

金子 一夫 43

原撫松の遺作展

丹尾 安典 49

松本保居の墓所と霊明社

森 登 58

銅・石版画遺聞98

戦時における工芸と生活

森 仁史 66

——「輸出工芸」と「国民生活用品」

『一寸』九十五号〜一〇一号 目次

74

本誌『一寸』は百号を越え百一号となった。ことわざに「一寸延び

れば尋延びる」の語がある。一寸(約三センチ)が延びて行けば、いよ

いよ寸の単位から人が左右に両手を広げた身体尺の「尋」の単位とな

る。解釈としては、当座の困難を何とか凌いでおけば先には楽になる

として、辛抱、根気の大切さを説く。だが反する解釈もあつて、先延

ばしにしているとそのうち取り返しがつかなくなる、小さな遅れが大

きな遅れとなるとの解釈もある。どちらにせよ本誌も百を越えたと安

堵しては居られない。何とかネタが尽きないようにしたいが、そう好

都合に行かない。好奇心や体力の衰えは待つてはくれないからだ。

相変わらずの「版画」、否「板画」の話である。版画史研究会の例会

で発表することとなった。私は木版画だけの展覧会には「板画展」と

使い、銅版画・石版画も加わるのなら「版画展」とするのを個人的に

は良しとしている。具体的には渡邊庄三郎提唱の大正・昭和期の浮世

絵復興木版画制作活動を「どう名づけるべきか」で、「新版画」とする

ことには異を唱え、「新版画」こそ「S. Watanabe」(渡邊庄三郎)による

渡邊版画店出版の多色摺木版画)ブランドにふさわしいとして来た。そ

のことには近代版画史に「板画」・「版画」の使用を解明しておく必要

* * *

百号の壁を乗り越えて、一〇一号を刊行することが出来ました。二〇〇〇年一月に創刊してから既に二十五年が過ぎ、三人が鬼籍に入り、残りの同人も後期高齢者、どこかしらに故障を抱えながら、相変わらず張り切っています。内容は益々充実、ではなく、相変わらず凸凹、統一感のないままに、各人各様。

おそらく同人誌の長命の秘訣は、制約で縛ることではなく、各自が好きなことを書くことでしょうか。一号当たりの負担金も刊行当初から倍になりましたが、それにも拘らず、二十五年間、個性の強い、一家言を持った仲間が、仲間割れをすることもなく書き続けています。

岩切氏は相変わらず多忙な日々、四館を巡回する「橋口五葉展」で若い世代を叱咤しつつ、この際改めて「板画」と「版画」の区別をと動き回っています。岩波書店の『図書』五月号にも「橋口五葉と夏目漱石、さらに岩波書店」の一文を草しています。

大谷氏は本誌に黙々と、ではなく、雄弁に書き続けています。既に本誌の誌面の三分の一以上は、氏の「小菩薩」で占めている有り様。木茂翁が存命のころは、翁が大谷氏を大分挑発したのですが、それもまた今となっては懐かしい限りです。

金子氏は根気のいる教員調査を休んで、久しぶりに随筆風に自宅の庭の散策。何気ない筆遣いですが、調査が行き届き、書きなれているだけに、氏の文章は淀みなく、どこかしらほっとするものがあります。

丹尾氏は普段の饒舌さとは裏腹に、記録に徹しています。昔から原撫松と関わっていただけに、宴会学同様、記録として次代に残す積りで、記録することに徹底しているのでしょう。

姫路の森氏は、松戸の美術館

準備室時代にも大量の近代デザインの家具を集めたことですが、廃棄されていたような家具も今では、貴重な工芸品。かつて編集子が寄宿していた邸宅に訪ねてきた時も、昭和初期の家具類をみて、あれもこれも欲しいと言ったことです。それらの家具も家の取り壊しと共に破毀されてしまいました。

編集子は相変わらず銅版・玄々堂。おそらく私だけが知らなかったことでしょうか。この五月に平凡社から鈴木俊幸編『様式と造本』（本の文化史6）が刊行されました。十年以上前に初校を渡したままになっていたのですが、急に刊行が決まりました。岩切氏が「木版印刷の行方」、森が「江戸期銅版の展開と石版の濫觴」の一文を草しています。興味のある方は手に取ってみてください。

青木 茂
岩切信一郎
大谷 芳久
金子 一夫
丹尾 安典
*村田 哲朗
森 登
森 仁史
*山田 俊幸



一寸 第一〇一号
二〇二五年七月十五日発行
定価 千円（本体）
発行者 書痴同人
発行 学藝書院
制作 森 登
鎌倉市山崎二一九〇・六九〇一